



奥原 晴湖

天保8(1837)年～大正2(1913)年

奥原晴湖は、下総国古河片町(現・西町)に古河藩士の娘として生まれました。元治2(1865)年、29歳のときに画で身を立てるため、関宿藩士奥原家の養女となり江戸に出ます。

明治初期には豪放闊達な「東海描き」と称される作風を生み出し、それが維新期の気風と合致して南画家として一家を成します。明治24(1891)年になると、南画の衰退と共に終の棲家となる埼玉県熊谷の画室「繡水草堂」に隠棲し、高雅流麗な密画作品を数多く遺しました〔繡水草堂は、平成22(2010)年古河歴史博物館敷地内に改修移築〕。

「山水」は晴湖がその独自の画風を確立し、一世を風靡した最盛期の作品です。断崖の頂に立つ人物は、南画界のトップの一人となった晴湖を象徴するかのようにも思えます。写意を重んじた豪放な筆致が見どころです。



山水：絹本墨画/一幅/明治7年/東京国立博物館所蔵
Image：TNM Image Archives
画像提供：東京国立博物館



七面大明神応現図：紙本著色/一幅/弘化4年/妙光寺所蔵
東京国立博物館寄託 Image：TNM Image Archives
画像提供：東京国立博物館



葛飾 北斎

宝暦10(1760)年～嘉永2(1849)年

葛飾北斎は、江戸本所割下水(現・東京都墨田区)に生まれ、絵師を志して勝川春章に入門し、安永8(1779)年ころから錦絵を世に出し始めます。40代後半に曲亭馬琴と組んで描いた読本挿絵が評判となり、浮世絵師として一躍有名になります。「富嶽三十六景」は誰もが知る傑作です。

「七面大明神応現図」は、日蓮宗の信者であった北斎が、徳川家康の側室で日蓮宗大下護者・お方の方ゆかりの寺である古河市の妙光寺に、旅の途中で立ち寄って描いたものと伝えられています。この作品は、北斎が90歳で亡くなる2年前の弘化4(1847)年に制作されたものです。衰えを感じさせない晩年の筆力に、北斎の旺盛な創作意欲と、たぐいまれな技量が表れています。

東京国立博物館等所蔵

一部

展示品紹介



花鳥図：絹本著色/一幅/明治14年/東京国立博物館所蔵
Image：TNM Image Archives
画像提供：東京国立博物館



山姥：絹本著色/一幅/明治17年/東京国立博物館所蔵
Image：TNM Image Archives
画像提供：東京国立博物館



河鍋 曉斎

天保2(1831)年～明治22(1889)年

河鍋曉斎は、下総国古河石町(現・中央町)に生まれました。天保3(1832)年、2歳の時に家族と共に江戸に移り、7歳の時に浮世絵を学び、その後狩野派に入門して絵画修行を積みます。明治14(1881)年、第二回内国勸業博覧会に出品した「枯木寒鴉図」が事実上の最高賞である妙技二等賞を受賞。これによりその名が一躍有名となり、不動の地位を築き、卓越した技量の天才絵師として名をはせます。

左上の「花鳥図」も第二回内国勸業博覧会に出品されたことが確認されています。一見すると、色とりどりの秋草や花木が美しく華麗な印象を受けます。しかし、実はヘビがキ

ジを絞め殺そうと絡みつきの、タカがそれを狙うという、冷酷な弱肉強食の世界が表されています。隅々までに及ぶ精緻な筆遣いが、画面に漂う張り詰めた空気を一層強めています。

右上の「山姥」は、明治17(1884)年、第二回パリ日本美術縦覧会に出品されたものです。金太郎の母をイメージして描かれた山姥は、独特で厳かな雰囲気醸し出しています。山姥に抱かれ、青竹を手に白熊と力比べをする金太郎は、慌てた様子の白熊とは対照的に余裕の表情をしています。山姥のほつれ髪や衣装の模様など細部まで丹念に描かれており、曉斎が力を注いで制作したことがうかがえます。